

有明 島原

風土と
人を
辿る
旅物語
BOOK



海と大地と人の営みに出会う

環有明海(有明地域・島原半島地域)



物語の舞台は、有明・島原。
紡ぐのは地元の人たち。
あなたの心に響く旅が
きっと、ここにある。



風土と人の

営みを迎える旅に

出かけませんか！

初めてなのに、どこか懐かしい風景。海、大地、火山と共に生きている人々。有明地域と島原半島地域、海をはさんだ2つの場所を丹念にたどっていくと、ここならではの魅力がたくさん見えてきます。

日本一といわれる潮の満ち引きがあり、干潟が広がる有明海、干潟を干拓して

有明海を挟んだ2つの地域には、旅人の心を揺さぶる物語があった。

Live with Volcano

VIII 大地、火山、地球との対話の物語

HERITAGE IN DAILY LIFE

VII 身近な暮らしから生まれた遺産を巡る物語

Local hero & heroine

VI 志高く、ローカルヒーロー、ヒロインの物語

Living in the sea of the tideland

V 干潟・海と暮らす人々の物語

Health and Beauty

IV 有明・島原流ヘルス&ビューティーツーリズム

PRAYER TO HAPPINESS

III 祈り、幸せへの想いの物語

STORAGE OF COAL MINE

II 石炭、炭鉱と生きた記憶を辿る物語

作り出した広い平野、かつて国内有数の炭鉱があった町、活発な活動を繰り返す火山がつくり出した島原半島など、自然と、そこに根付く風習・工芸・食文化・産業、衣食住、こころざし、想いなど。長い時間の中で積み重ねられてきた人々の営みが、2つの地域に独自の彩りを添えています。

「風土と人を辿る旅物語」は、有明・島原の風土の中で、人が織りなす営みを追体験してもらう「旅の手引書」です。語り手は、この土地に暮らし、歴史を引き継ぎ、現在進行形で新しい物語を紡いでいる人たち。遠い記憶、新しい息吹。たくさんの人々が紡ぎだす、8つの物語の中から、あなたの心を揺さぶる物語がきっとみつかるはずです。

※「有明地域」とは、福岡県大牟田市並びに熊本県荒尾市、玉名市、玉東町、和水町、南関町及び長洲町をいふ。
「島原半島地域」とは、長崎県島原市、雲仙市及び南島原市をいふ。



想いをつなぐ 海のキリシタンロードを辿る

南島原 400 年前の通り

16世紀後半、九州のキリスト教布教の中心地だった南島原。日野江城下には、セミナリヨ(神学校)などが置かれ、その存在はローマ法王の耳にも届いていたという。宣教師たちはここから小舟で有明海を渡り、玉名の高瀬や伊倉へと上陸。さらに菊池川を逆上り、キリシタン大名・大友宗麟のいる大分へと向かった。「ある年、高瀬に辿り着いた宣教師を、一人の男が小屋へと案内し、宣教師たちは竹と赤い布で祭壇を設けて粗末な礼拝堂を造った」とルイス・フロイスの『日本史』に記録されている。クリスマスには、数人の信者が有明海を渡ってきてミサを開いた。これが記録に残る日本で二番目のクリスマス・ミサと言われている。

玉名での宣教師たちの足跡は、地元でもほとんど知られていないが、一基の「キリシタン墓地」がひっそりと残され、宣教師のものと言われる遺髪が保管されている。「海のキリシタンロード」を宣教師たちが確かに行き交っていたのだ。キリシタン文化が華開いた南島原や海に開かれた国際都市だった玉名、そこにいた人々へと想像の翼を広げると鮮やかに400年前の風景が浮かび上がってくる。

玉名には 宣教師たちの足跡が ひっそりと 息づいています

くまもと戦跡・文化遺産ネットワーク
代表 松本重美さん
まほんしづみ



地元玉名の歴史を長年研究し、講演活動なども行っている松本さん。玉名市では平成25年(2013年)に『450年前のクリスマス』というテーマのシンポジウムと朗読劇が行われるなど、今まであまり知られていなかったキリシタンと玉名の繋がりにスポットが当てられている。

約450年前に日本で宣教師が行き来した「キリシタン・ベルト」と呼ばれるルートは、島原から有明海を渡って玉名に着き、菊池川をさかのぼり、菊池から小国を越えて大分へ至ったとされる。それを物語るものとして、玉名には当時のキリシタン墓地があり、紅毛の遺髪も残されている。

+

「永祿6年(1563年)の秋に、佐世保の横瀬浦でキリシタンの焼き討ちがあり、トレス神父たちがポロポロになりながら逃げて来たらしいです。浜辺を彷徨っていたら、名主さんみたいな人が自分の小屋に案内され、半年ほど滞在されました。そこへ島原にいた信者が来て、日本で2番目に古いクリスマス・ミサが行われた記述が、ルイス・フロイスの『日本史』にあります」

キリシタンに様々な苦難があった

時代、キリシタン大名の大友氏領だった玉名には多くの宣教師が訪れ、有明海を行き来していた。

「以前ルイス・テアルメイダ研究者である東野先生の講演があったとき、宣教師たちをお世話したであろう家に伝わる紅毛の遺髪を、2、3本持って帰り、放射性炭素年代測定をされました。400年ほど経過し、東洋人の髪ではなく血液型はB型ということまで分かったんです。状況からすると、アルメイダさんの弟子のシルバー修道士ではないかと思えます。今は玉名市歴史博物館で保存されています」

玉名は永祿3年(1560年)から天正18年(1590年)までの約30年間、安全に行き来できる交通の拠点であり、宣教師にとって重要な場所であった。

■お問合せ

くまもと戦跡・文化遺産ネットワーク
TEL 0968-72-3544

南島原市



南島原400年前の通り
宣教師ルイス・フロイスが「細く長く美しい通り」と伝えた道。

☎ 長崎県南島原市北有馬町戊 0957-65-6333(南島原ひまわり観光協会) ☎ 無 ☎ 無

南島原市



有馬キリシタン遺産記念館
キリスト教伝来と繁栄、弾圧などの歴史を学ぶことができる。

☎ 長崎県南島原市南有馬町乙 1395番地 ☎ 0957-85-3217 ☎ 有 ☎ 有



400年前のクリスマス・再現イベント

南島原が
キリシタン布教の拠点だった

400年前の
光と陰を
伝えていきたい

南島原ガイドの会『有馬の郷』
会長 内山哲利さん
ありやまのくにのり



生まれ育った故郷の歴史に関心があった内山さん。生涯学習の一環で教育委員会が募集した歴史講座を受講し、その1年後ガイドに。平成26年(2014年)8月に南島原のガイド団体が集まり『有馬の郷』が発足した。

今から約400年前、有馬領でキリスト教の布教が許された口之津が南蛮貿易港として開港した。秀吉のバテレン追放令が發布されると、領主の有馬晴信はひそかに宣教師保護をしたため多くの宣教師が集まった。また領主自身もキリスト教を熱心に信仰して領民にも広め、多くの人が信者になった。

+

「ここがキリスト教布教の拠点になったのは、有馬義貞がトールレス神父に書簡で修道士の派遣をお願いして、トールレス神父は修道士ルイス・デ・アルメイダを派遣しました。布教が許可されると、玉名の高瀬に難を逃れてい

たトールレス神父が口之津に来られま

した」

「有馬義貞は、永禄5年(1562年)に口之津を開港してキリスト教の布教を許可し、肥前の龍造寺との対立から、国力増強のために南蛮貿易に力を入れ、後に自らもキリスト教の洗礼を受けました。次代の有馬晴信は、最初キリシタン嫌いだっただけですが、龍造寺に対抗するため南蛮貿易を積極的にに行い、宣教師を受け入れキリスト教へと改宗しました」

有馬氏の支配が安定すると、さらにキリスト教が隆盛していった。

「ルイス・デ・アルメイダが口之津で布教を始めると、あつという間に信者が増え、島原半島にキリスト教が広がりました。また、キリシタン大名になった有馬晴信は仏教などを弾圧し、それまであった各地の神社・仏閣を破壊して、仏塔や墓石などを日野江城の階段に使ったり、領民もキリスト教へ改宗させました」

宣教師たちの日本の玄関口となった口之津。キリシタン大名・有馬氏の庇護で信者や施設も瞬く間に増え、宣教師は各地へと布教に赴いた。

■お問合せ

南島原ひまわり観光協会
TEL 0957-65-6333

南島原ガイドの会『有馬の郷』
副会長 佐藤光典さん
さとうみつひ

400年前の
キリシタン文化

南島原で花開いた
キリシタン文化を感じて下さい



20年ほど前にスタートした地元の文化遺産を勉強する会に参加。世界遺産候補になった機会にもう一度歴史を学び直し、ガイドの勉強もしている。平成26年(2014年)8月に南島原のガイド団体が集まって『有馬の郷』が発足。現在副会長を務めている。

永禄5年(1562年)に口之津港が開港し、多くの外国人が訪れるようになった南島原。天正7年(1579年)には口之津の教会で宣教師会が行われ、キリスト教を布教するために聖職者を育てる学校『セミナリヨ』を作る話し合いが行われた。

+

「宣教師たちは、キリシタン大名だった大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の領国のいすれかにセミナリヨを作るうと話し、有馬晴信が土地を寄進したことで天正8年(1580年)に日野江城の城下に作られ、当初22名の生徒でした。ラテン語、ポルトガル語、日本語や古典のほか、音楽、体育などを学び、外国から来た人たちはここで学んで全国に布教に赴きました」

セミナリヨは途中場所を変えながら

もこの地に33年間存在した。400年前の南島原には、いたるところにキ

リスト教やヨーロッパの文化が溢れ、異国情緒漂う美しい町だった。

「1500年代後半から1600年にかけて、日野江城の城下は煌びやかな街で、宣教師のルイス・フロイスはローマに報告した手紙で、城下町には贅を尽くした教会が建てられ、その前には細く長く美しい通りがある」と書いています。また、セミナリヨを建てる立地として、北風を防いで日が当たる場所、さらに前に広場があることが条件だったそうです」

南島原が一番輝いていた時の歴史を知ってもらおうと、18年前から毎年12月に『フェスティビタス・ナタリス』という400年前のクリスマス行列を再現したイベントが行われ、現代にその面影を伝えている。

■お問合せ

南島原ひまわり観光協会
TEL 0957-65-6333

玉名市



伊倉のキリシタン墓地
伊倉で亡くなった修道士のものとも言われる墓が残されている。
図 熊本県玉名市伊倉
☎ 0968-73-2222(玉名市商工観光課)
☑ 有 ☑ 無

玉名市



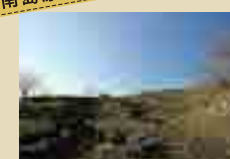
高瀬船着場跡
中世から明治初期まで交易拠点として栄えた港跡。
図 熊本県玉名市永徳寺字414番地15地先
☎ 0968-73-2222(玉名市商工観光課)
☑ 有 ☑ 無

玉名市



玉名歴史博物館こころピア
400年程前のものと推定される「伝バテレンの髪の毛」を保存。
図 熊本県玉名市岩崎117
☎ 0968-74-3989
☑ 有 ☑ 無

南島原市



日野江城跡
宣教師たちを庇護したキリシタン大名有馬氏の居城跡。
図 長崎県南島原市北有馬町戊
☎ 0957-65-6333(南島原ひまわり観光協会)
☑ 有 ☑ 無

南島原市



有馬セミナリヨ跡
ここに日本で最も早くイエズス会の中等教育機関が創立された。
図 長崎県南島原市北有馬町戊
☎ 0957-65-6333(南島原ひまわり観光協会)
☑ 無 ☑ 無

暮らしにいまも息づく、 炭鉱とともに生きたDNA



今も一部で使われている三池鉄道

室町時代に石炭が大牟田の地で「発見」されたことで、明治時代以降の大牟田、荒尾、そして南島原・口津の運命は大きく変わった。石炭とともに大きくなったまち、石炭中心の人の営み。炭鉱は平成9年（1997年）に閉山したが、大牟田や荒尾のまちのあちらこちら、あるいは市民の暮らし、文化の中に炭鉱の記憶が色濃く残っている。例えば、炭鉱で働く人が疲れた体を癒やしていた甘いお菓子、手軽にお腹を満たすB級グルメ。大牟田が発祥の地といわれる「かすてら饅頭」あるいは「メロンパン」、「お好み焼」など、炭鉱で働く人々が好んだ食を、いまでも地元の人々は愛してやまない。一方、三池の石炭の積出港となり、繁栄を極めた口津津は、大正時代に役目を終えると、日本一船員が多い町になり、今でも船で働く人が多い。これも三池炭鉱がもたらした置き土産である。

今なお人々のDNAの中に残っている「炭鉱文化」を辿ること、それは世界遺産候補となっている資産の存在意義を、別の角度から眺めて実感する、もうひとつの世界遺産「探訪の旅」なのである。

石炭、炭鉱とともに 歩んだ 地域の歴史を、 後の世に

大牟田市石炭産業科学館
館長 五本松恵美子さん
ごほんまつ けいこ



三池炭鉱の歴史や使われていた機械の展示、模擬坑道での体験ができる『石炭産業科学館』の館長。生まれも育ちも大牟田市。炭鉱の歴史と技術は奥が深く、就任2年目でも猛勉強中とのこと。地元の若い人に炭鉱の歴史を伝えたいと熱い思いを抱いている。

殖産興業の柱として、近代化を進める明治日本の産業・通商を支え、三井財閥や大牟田、荒尾地域を発展させた三池炭鉱。黒いダイヤと呼ばれる石炭は、様々な産業を興し、人々はその恩恵を受け豊かな暮らしを営んできた。

「石炭の発見は、室町時代に伝治左衛門という人が三池郡の稲荷山（とうか）やまで焚火をしていたら、石が燃え出したのが最初と伝えられています。産業として採炭を始めたのは江戸の中期以降で、明治6年（1873年）からは官営となりました」

殖産興業、外貨獲得のため近代化した三池炭鉱。三井に払い下げられた後、炭鉱と共に大牟田・荒尾はさらに発展

した。

「明治22年（1889年）1月、三井へ払い下げになると同時に工部省の役人だった團琢磨が招かれ、三池炭鉱の初代事務長となります。まず、勝立坑の湧水問題をイギリスから最新のテレビープを輸入することで解決し、それに続き宮原坑、万田坑、三池港などを次々と造って、三池炭鉱や大牟田市の礎を築きました」

團琢磨により炭鉱や都市の基盤が整備され、人々の暮らしにも恩恵がもたらされた。

「明治42年（1909年）には、炭鉱の社宅に、「社水」と呼ばれる水道が引かれ、周辺の家にも供給されました。また、石炭を原料に工業製品を作る石炭コンビナートも形成され、昭和

34年（1959年）頃には、大牟田市は約21万人の人口を擁する都市となりました」

まちの歴史や生活のいたる所に、今も炭鉱の記憶を見ることができ、
■お問合せ
大牟田市石炭産業科学館

TEL 0944-531-2377

大牟田市



大牟田市石炭産業科学館

石炭や炭鉱、炭鉱と歩んだまちの歴史などの学習・体験ができる。

福岡県大牟田市岬町 6-23

☎ 0944-53-2377

☎ 有

おむた洋風かつ井研究会
会長 大塚力久さん
おむたのついで



小さい頃から母親に連れられ松屋デパートに行っていた大塚さん。小学校の頃にはすでに洋風かつ井の味にハマリ、行く度に家族と食べていた熱烈なかつ井ファン。思い出の味を再現しようと何百回も自分で洋風かつ井を作り、復活へと繋がった。

がつつり食は炭鉱マンから受け継ぐ地域の食文化です

大牟田市民の憧れであり特別な存在だった『松屋デパート』。その食堂で長年市民に愛された名馳走が『洋風かつ井』だった。平成16年(2004年)に惜しまれつつも閉店したデパートだが、あの懐かしい味をもう一度と願う市民は多く、デパートが閉店して10年がたった節目に復活を遂げた。

「松屋デパートは大牟田市民にとって、行くことがステータスでお洒落をして出掛けるような場所でした。炭鉱で働く人達も給料日になると6階のレストランに行き、家族で食事をするという風な感じでしたよ」

「昭和23年(1948年)に誕生した洋風かつ井は、和食と洋食の料理長がコラボして作られ、鶏ガラスープと和風だし、醤油、ウスターソースをベースにした当時から一番の人気メニュー

三池炭鉱が、近代の口之津に大きな影響を与えました

永祿5年(1562年)に開港した口之津港は、天正9年(1582年)に最後の南蛮船が来るまで大いに賑わい、その後歴史の表舞台から消えてしまふ。しかし明治9年(1876年)に、三池炭鉱から産出される石炭の積み出し港として再び脚光を浴び、一時は『口之津銀座』と呼ばれるほど繁栄した。

「大牟田に三池港ができるまで、大型船は入港できなかったため、三井が明治9年(1876年)に口之津を石炭の積み出し港に決めました。明治32年(1899年)に貯炭場の完成や税関の移築、与論島などから入夫として移住した人が最多となり、最も賑わい

ました。『口之津には全国から商人がやって来て、1kmに満たない通りに162軒の商家が軒を連ねました。税関や三井物産の支店、外国人船長や三井の重役などが利用する三井倶楽部などもありました。当時、与論島から来た人を含めずに12000人の人口がありました」

外国に繋がる港として様々な人が行き交い、活気に満ちた口之津。だが明治41年(1908年)に三池炭港の完成により徐々に衰微し、昭和2年(1927年)に三池港が改修されると繁栄の時代は終わりを告げた。

三池炭港により口之津の繁栄がなくなったため、三井は口之津の男性を三井商船の船員として雇いました。昭和40年代、口之津の全世帯の6割を超える世帯が外国航路の船員という時代があり、『口之津は『船員の町』と呼ばれました」

口之津の家庭では、当時珍しかった外国製品がどの家でも飾ってある。石炭と生きた歴史は形を変えて伝わっていた。

■お問合せ
口之津歴史民俗資料館・海の資料館
TEL 0957-8614880



口之津歴史民俗資料館・海の資料館
館長 原田建夫さん
はらだ ただむさし

平成15年から口之津歴史民俗資料館の館長を務める原田さん。小学校の元校長先生で「歴史は一番嫌い」といいつつ、深い歴史の知識が話の端々に織り込まれる。興味を惹きつける話術はさすがのひと言。

南島原市



口之津歴史民俗資料館・海の資料館
海、石炭と共に栄えた口之津の歴史などを見ることが出来る。
〒長崎県南島原市口之津町甲16番7
☎ 0957-86-4880
☎ 有 ☎ 有

荒尾市



万田坑
明治時代に日本最大規模の出炭を誇った坑口。当時の最新鋭の設備が今も残されている。
〒熊本県荒尾市原万田 200-2
☎ 0968-57-9155 (万田坑ステーション)
☎ 有 ☎ 有

大牟田市



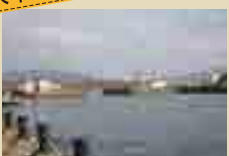
旧三井港倶楽部
明治41年(1908年)の三池港開港にあわせて建てられた木造2階建ての洋館。
〒福岡県大牟田市西港町2-6
☎ 0944-51-3710
☎ 有 ☎ 有

大牟田市



宮原坑
明治31年(1898年)開坑。年間40~50万トン出炭していた明治、大正時代の主力坑。
〒福岡県大牟田市宮原町 1-86-3
☎ 0944-41-2515 (大牟田市世界遺産登録・文化財型)
☎ 有 ☎ 有

大牟田市



三池港
石炭を大型船に直積みするため、明治の最先端技術で築かれた港。
〒福岡県大牟田市新港町
☎ 0944-41-2515 (大牟田市世界遺産登録・文化財型)
☎ 有 (高速船乗り場前広場) ☎ 有